

穏やかで肩の凝らぬ友

丸 山 敬 一

松岡利道氏と私がいつ頃から親しくなったのか、はっきりとした記憶はない。遠い昔まだ昭和40年代の終わりか50年頃だったと思うが、大阪市大の星野中ゼミでJ・P・ネトルの『ローザ・ルクセンブルク』（河出書房新社）上・下巻を半年にわたって輪読するという話を聞き、私も頼んで出席させてもらった。夏休みに入って、このゼミは飛騨高山の丹生川で3泊4日のゼミ合宿を行った。休み時間に千光寺の円空仏を見に行ったりした。その中に皆より首一つ抜きん出た長身の松岡氏を見たことをおぼろに覚えている。

1981年から翌年にかけて、私と松岡氏は全くの偶然であったが共に西ドイツ（当時）に在外研究にでかけた。シベリアを通り北欧4ヵ国をまわって単身ドイツ入りした私には初めの4ヵ月間程家族がいなかった。私にまつわりついていた幼い娘二人が急にいなくなって、私は両脇に風がスースーと吹き抜けていくような寂しさを覚えた。寂しさに耐えかねた私はいろんな友人宅を訪ねたが、10月中旬にはブレーメンの松岡氏宅に出かけ2泊3日滞在させてもらった。松岡氏一家はブレーメン市内をいろいろと案内してくれた。10月中旬であったが北海から吹いて来る風は冷たく、時々喫茶店のような所に飛び込んで暖をとりながら歩いた。翌年4月には今度は松岡氏が一人になってしまった。子供たちの学校のことを考え、新学年の開始に合わせて奥さんが子供二人を連れて日本に帰ってしまったからである。夏頃になって松岡氏から電話がかかってきた。「今ボンのエーベルト・シュティフツングにいる。よかったら来ないか」。私はすぐ出かけた。そこにポーランド人のカウツキー研究者マレクという人がいて3人で食事をとった。私が「ローザ・ルクセンブルクのポーランド論とトルコ論を日本語に訳して出版したことがある」というと「ローザのポーランド論よりカウツキーのポーランド論の方がはるかに優れている。カウツキーのポーランド論を訳しなさい」と彼は言った。私は「日本に帰ったら訳して出版しましょう」と答えたが、未だその約束を果たしていない。その後松岡氏は車で一緒にランペルトハイムの私の家に来て2泊か3泊していった。彼は車でオーデンヴァルトの山の中の美しい町ヤルターの宗教改革で有名なヴォルムスの町に連れて行ってくれた。ブレーメンに帰る時、車で妻と下の娘を幼稚園まで送ってくれたのだが、妻の話では、彼は「ああ、また独りの所に帰るのか」とつぶやいていたという。妻が「もう2～3泊していってくださればよいのに」というと、「そういうわけにもいきません」と答えて彼は帰って行ったという。帰りにはフランクフルトの古本屋街に寄るつもりだ、ということであった。いずれにせよ、偶然に同時期だったこのドイツ留学が私と松岡氏の距離をぐっと親しくさせたのは間違いない。

私と松岡氏が日本に帰った82年の9月に八王子の大学セミナー・ハウスで中国人研究者5人程

を招いてローザ・ルクセンブルクに関するシンポジウムが開かれた。その返礼として85年に我々は上海での学会「中日学者ローザ・ルクセンブルク学術討論会」に招待され、松岡氏も私も参加した。日本からは7名が参加したが、私にとっては初めての中国旅行であり、この学会途中の蘇州観光や学会終了後の南京、北京と続く旅は実に楽しかった。その後何度も中国に出かけたが、この時食べた程においしい中国料理にその後出会ったことはない。

91年には東京でやはりローザに関するシンポジウムが開かれたが、その詳細は報告集『ローザ・ルクセンブルクと現代世界』（社会評論社）に載っている。

94年には北京市郊外臥仏寺でローザに関するシンポジウムが開かれた。参加者は成田空港と関西空港から中国に向かったが、関西組はシンポジウムの前日に着く都合のよい飛行機がないため、前々日に着き、一日何の予定もない日ができてしまった。臥仏寺では、その名の通り仏様は横になっており、仁王様は椅子に腰掛けていたが、実に美しい寺であった。10月末のこととて、裏山は色づき始め、連日北京秋天の快晴が続いた。我々はこの1日を紅葉狩りに費やした。星野中、正木八郎、松岡利道の3氏とのこの一日は今でも楽しい思い出である。

松岡氏の主著は『ローザ・ルクセンブルク—方法・資本主義・戦争』（新評論、1988）である。この本が出版されるとすぐ龍谷大学経済学部から「この本の合評会をやるからきてもらいたい」という連絡があり、龍谷大学の先生たちが侃侃諤諤の討論をし、私は一言二言述べればいいのだろう、ぐらいに軽く考えて承諾の旨返信したところ、合評会予定日の3日前になって「今回の合評会は先生御自身の書評をお聞かせいただくのが目的だからよろしく」という速達が来て青くなった。大慌てで一時間ぐらひ話せる内容を用意して、なんとか責任を果たした。当時のスケジュール・ノートを見ると、同じ週の日曜日にドイツ現代史研究会（京都、立命館大白梅荘）でもこの本の書評をしている。その後それを文章化して龍谷大の紀要に載せよ、ということになり28巻3号（1988年12月）に載せた。

松岡氏の本の出た翌年1989年はフランス革命200年に当たる年であったが、ベルリンの壁崩壊からソ連邦崩壊（1991年）に到る社会主義体制崩壊の始まった年でもあった。後世の歴史に激動の年として記録されることであろう。その後マルクス主義の権威は全く失墜し、もはやマルクスの著作を読む若者は皆無となってしまった。資本主義はますます危機を深めているが、革命的プロレタリアートはどこにも現れない。生産手段を社会化し、計画経済をやってみたところで社会は少しもよくなるどころか、かえって悪くなるということを多くの人々が知ってしまったからである。松岡氏も私の知る限り、この大著の出版の後ローザ・ルクセンブルクについては何の発言もしていないと思う。

私と松岡氏を結びつけるものは、このようにローザ・ルクセンブルク研究であったが、なぜルクセンブルク研究を始めることになったのかとか、ローザ革命理論の有効性とかいうことについては全く議論した記憶がない。

むしろ我々はよく戯言を言って楽しんだ。例えば次のような話である。昔大阪市大に佐藤金三郎という先生がいた。彼は横浜国大に移って後61歳位で急逝されたが、まだ大阪市大にいた頃の

ある時、本を借りるか何かの所用があって先生の研究室を訪ねたことがあった。そこにたまたま松岡さんがいた。二人とも長い顔をしていた。私はそのことを話して後「俺はきゅうりの畑に踏み込んだのかと思ったぜ」とふざけた。最初の時は、松岡氏は苦笑していただけだったが、2回目に同じ話をした時には「俺はかぼちゃが紛れ込んできたかと思ったぜ」と反撃されてしまった。

学会か研究会の後の懇親会の席だったと思うが、松岡さんが酒をついでくれたことがあった。「明治の元勳と同じ名前の人に酒をついでもらうのは恐れ多い」と私が戯言を言うと、「いや大久保利通と私は字が一字違うのですよ」と彼は澄ましていた。たしかに大久保は「利通」であり、松岡氏は「利道」であった。

松岡氏が龍谷大に就職した頃には、長谷部文雄とか山田盛太郎とか、後にマルクス経済学を勉強し始めた人にとっては、いわば「神話上の人物」「伝説上の人物」ともいうべき人々が廊下を歩いていて本当にびっくりした、という話も聞いた。当時龍谷大は定年が80歳でかなり高齢の先生方も雇用していたという噂であったから、それも本当のことであったろう。

私はポリシェヴィズムとは違うマルクス主義理論を作り出そうとして、ローザの政治理論を体系的に究めるつもりであった。年代順に挙げれば、民族理論、修正主義論、党組織論、大衆ストライキ論、帝国主義論、ロシア革命論などを究めて一書とするはずであった。ところが、彼女の若い頃のポーランド論を研究するうち、民族自決権をめぐる鋭く対立したレーニンやスターリンの民族理論に関心に移り、さらにマルクス、エンゲルスの民族自決権論にさかのぼり、さらにレーニン、スターリンが口を極めて非難するオーストロ・マルクス主義者のレンナー、パウアーの民族自治論の研究の方へと関心が移って行ったため、ローザ政治理論の研究の方は全く進展しなかった。それにひきかえ松岡氏は、ローザの経済理論を全体として研究された。我国では、ローザはトロツキーやグラムシと並んで大変人気のあった革命家であるが、どういうわけか単行本の形に纏められた研究書はそれまで皆無であった。松岡氏の上記の本が、単行本の形に纏められた我国最初の研究書である。

松岡氏の姿を最後に見たのは、2007年10月13日の立命館大学での社会思想史学会の折である。この時私は大変体調が悪く、会場までは行ったのであるが、とてもシンポジウムなどを聞く元気はなく、京都駅に出て帰宅しようと思い、せめて松岡氏に挨拶しようとした。背の高い彼は遠くから目についたが、誰かと話していて一向に終わりそうにない。悪いことに松岡氏と話そうという人が、もう一人待っている様子であった。京都駅で乗りたいと思う電車の時刻が迫ってきていたので、「松岡氏にはいつでも会える」と思って別れの挨拶をせずに帰ってしまった。これが松岡氏の姿を見た最後となった。

松岡氏は本来大変穏やかな人物だったと私は思う。激しく自説を主張するということもなかったし、怒りを露わにした顔など見たこともない。私にとっては肩の凝らない友人であった。所用で京都駅前のホテルに泊まっていた時、彼に電話すると「一杯飲もう。俺の所から京都駅までは30分程で出られるから」と言って出てきて、一緒に一夜楽しく飲んだこともある。東京でのシンポジウムの帰り、新幹線の中で車内販売のウイスキーを買い、名古屋まで2時間二人で酒盛りを

してきたこともある。こういう時の松岡さんは、いつもカラカラと笑い、実に楽しそうであった。これからもこうした気楽な付き合いを長く続けて行くことのできる友人だと思っていたのに、もはや電話も届かぬ所に逝ってしまった。残念という外はない。